しがたくして、山中にとゞまる、

〔空華日工集〕應安七年二月十五日、赴管領甲第、領問政事之要、余曰、凡政事當先賞而後罰、不爲人憂、則可謂善政矣、仍乞湯醫之暇、入府亦乞口七七日爲湯醫、往熱海宿山崖家、

〔皇國名醫傳後編中〕香川修庵從子主善

香川修德、字太冲、以字稱、〇中略於是厲志專精講求、累年著藥選行餘醫言等書、以推衍師說、醫道益闡、而於温泉及灸炳治効最致詳、

〔漫遊雜記上〕香川氏曰、温泉不熱者無益于病者、可謂夏虫之見矣、藝州佐伯郡有泉曰水内、治腰脚不隨者有奇効、其泉頗冷、秋冬難浴、

〔温泉考〕近頃、京都の後藤左一の門人香川太冲のあらはすところの藥選といへる書を見侍りしに、その續編に温泉のことを論じて、温泉、硫黄にて沸くといふ說をうけがはず、稻若水の說を引ておもへらく、地中に水の筋あり、火の筋あり、その火の筋、水筋に出會へば、温泉となるといへり、その說是なることは是なり、さかれ共甚疎なり、まして是游子六の說を拾ひしものにして、若水はじめて唱へし說にはあらず、さかし天經或問は、近頃渡りし書なれば、若水は、萬一これを見ずして、偶その說の暗合せしもされざれ共、太冲の游子六の說なることをさらずして、若水初て唱へられし說なりとおもへるは、深く考へざるあやまりなり、又太冲の說に、硫黄といふものは、温泉によつて生ずるものなり、硫黄はすなはち是湧泉の發する滓なりといへるは、是又あやまりなり、右にいふごとく、温泉も地中の陽火にて湧き、硫黄も地中の陽火、土中の膏液を蒸しこらすものゆへに、硫黄と温泉とつれそふことはつれそふ理なれ共、必竟するところ、温泉は温泉、硫黄は硫黄、たとへば地中の火は母にして、温泉と硫黄は兄弟なるがごとし、故に硫黄温泉を生ずといへるは、もとより非なり、又温泉硫黄を生ずといへるもあやまりなり、それゆへ温泉ある所、硫